

はれしをあはてふためきけるといはれん事、末代に至まで口おしかるべしとて、橋を警固仕れとて、靜に御渡り候しなり、此故に御勢を待奉て、橋を守候なりと申ければ、是を聞人皆々涙を流し、弓矢の家に生れては、誰もかくぞ有べけれ、疑なき名將にて御座ありけるとて、義貞を感じ申さぬ人ぞなかりける。

〔太平記 十四〕官軍引退箱根事

十二月二年○建武 十四日ノ暮程ニ、天龍河ノ東ノ宿ニ著給ニケリ、時節河上ニ雨降テ、河ノ水岸ヲ浸セリ、長途ニ疲レタル人馬ナレバ、渡ス事叶マジトテ、俄ニ在家ヲコボチテ、浮橋ヲゾ渡サレケル、此時モシ將軍足利ノ大勢後ヨリ追懸テ、バシ寄タリシカバ、京勢ハ一人モナク亡ブベカリシヲ、吉良、上杉ノ人々、長僉議ニ三四日逗留有ケレバ、川ノ浮橋程ナク渡シスマシテ、數萬騎ノ軍勢殘ル所ナク、一日ガ中ニ渡テケリ、諸卒ヲ皆渡シハテ、後、舟田入道ト大將義貞朝臣ト二人、橋ヲ渡リ給ヒケルニ、如何ナル野心ノ者カシタリケン、浮橋ヲ一間、ハリヅナヲ切テゾ捨タリケル、舍人馬ヲ引テ渡リケルガ、馬ト共ニ倒ニ落、入テ浮ヌ沈ヌ流ケルヲ、舟田入道誰カアル、アノ御馬引上ゲヨト申ケレバ、後ニ渡ケル、栗生左衛門鎧著ナガラ川中へ飛ツカリ、二町計游付テ、馬ト舍人トヲ左右ノ手ニ差揚テ、肩ヲ超ケル水ノ底ヲ閑ニ歩テ、向ノ岸ヘゾ著タリケル、此馬ノ落入ケル時、橋二間計落テ渡ルベキ様モナカリケルヲ、舟田入道ト大將ト二人、手ニ手ヲ取組デ、ユラリト飛渡リ給フ、其跡ニ候ケル兵二十餘人、飛カネテ、且シ徘徊シケルヲ、伊賀國住人ニ名張八郎トテ名譽ノ大力ノ有ケルガ、イデ渡シテ取セントテ、鎧武者ノ上卷ヲ取テ中ニ提ゲ、二十人マデコソ投越ケレ、今二人殘テケルヲ、左右ノ脇ニ輕々ト挾テ、一丈餘リ落タル橋ヲユラリト飛テ、向ノ橋桁ヲ踏ケルニ、踏所少モ動カズ、誠ニ輕ゲニ見ヘケレバ、諸軍勢遙ニ是ヲ見テ、アナイカメシ、何レモ凡夫ノ態ニ非ズ、大將ト云、手ノ者共ト云、何レヲ捨ベシ共覺ネ共、時ノ運ニ引レテ此軍サニ打